

〈資料紹介〉

今金町「読書と作文のまちづくり」活動報告(Ⅲ)

伊藤公紀^{*1} 白岩政浩^{*2} 田中俊一^{*3} 田名部紗穂里^{*4} 松原真一^{*5}
小川ひとみ^{*6} 小野嘉代子^{*7} 石田ゆき^{*8} 鹿内信善^{*9}

I. 本稿の位置づけ

2013年度～2015年度までの3年間、日本学術振興会科学研究費(挑戦的萌芽研究)(研究代表者鹿内信善)の助成を受けて、「読書と作文のまちづくりに関する実践的研究」を行ってきた。科研費の助成期間は終了したが、フィールドとなっている今金町の「読書と作文のまちづくり」活動はまだ活発に続いている。研究期間終了後もなお継続されていることが、科研費助成を受けて行った研究の最大の成果であると考えられる。そのため、今年度も今金町の「読書と作文のまちづくり」活動の成果を報告書としてまとめることにした。なお、これまでの成果は伊藤他(2015, 2016)にもまとめられている。

以下に、まず、今金町社会教育主事として「読書と作文のまちづくり」活動に携わっている白岩政浩が2016年度の活動概要を報告する。

II. 2016年度「読書と作文のまちづくり」活動の概要

今金町教育委員会社会教育主事 白岩政浩(執筆)

■図書ポイント制度「としよぼ」

2014年10月よりモデル的に導入した制度であり、2015年4月から本格的に導入し取り組んでいる。本格的に導入した2015年の今金町民センター図書室での図書貸出し冊数は

*1 札幌大学地域共創学群経営学系教授

*3 今金町教育長

*5 今金中学校校長

*7 今金町教育委員

*9 福岡女学院大学人間関係学部教授

*2 今金町教育委員会社会教育主事

*4 今金小学校教諭

*6 今金町読書と作文のまちワーキングチームチーフ

*8 日本医療大学非常勤講師

前年より 2393 冊多い 16522 冊となり、図書ポイント制度に取り組む際、目標に掲げた町民 1 人あたりの利用冊数 3 冊を達成することが出来た。

冊数及び利用が増えた背景にあるものは町民センター図書室の夜間開室日数を 1 日増やし 2 日間にする取り組みや、中学校に毎週火曜日「司書派遣事業」として教育委員会図書担当職員を派遣するなど、「読書と作文のまち」をベースとした学校・家庭・地域・行政の「実践（行動）」の積み上げの成果であると感じている。

2016 年 12 月現在、9 カ月で 450 点の図書ポイントを越えた利用者もいる。今後も楽しく本にふれ、図書室が町民のコミュニティ形成の場となるよう、継続して取り組んでいきたい。

◇ 2014 年 10 月～ モデル実施

◇ 2015 年 4 月～ 本格実施

■読書と作文のまちワーキングチーム会議

読書と作文のまちワーキングチームの会議は、学校・家庭・地域・行政の委員によるグループワーク形式での会議運営に努めている。この活動を今金町らしい取り組みにしてい くためにも個々の意見を吸い上げ、形にしていくグループワークが必要である。その中で提案したものを一つひとつ実践し、積み上げていくことが重要であると感じている。今後 もそれぞれの立場の意見を融合し、新しい実践につなげてい きながら変革の時代にも柔軟に対応していける組織運営を心がけていきたい。

◇ 2016 年 5 月 31 日（火） 第 1 回読書と作文のまちワーキングチーム会議

◇ 2016 年 9 月 15 日（木） 第 2 回読書と作文のまちワーキングチーム会議

◇ 2016 年 11 月 17 日（木） 第 3 回読書と作文のまちワーキングチーム会議



写真 1 ワーキングチーム会議その 1



写真 2 ワーキングチーム会議その 2

■読書と作文のまち PR ブース設置事業

2016 月 12 月現在までに、町内小中学校の学習発表会や文化祭、町の総合文化祭など町民や町外の方々が多く集う機会に読書と作文のまち PR ブースを設置し、情報発信を行った。

この取り組みを実践した理由として、読書と作文のまちワーキングチーム会議の中で、「関わっている委員は取り組みをよく理解しているが、町内でも取り組みを知らない方もいる。もっと町内へ発信しなければならない」との意見が出され広く取り組んだ。

◇学習発表会 → 今金小学校、種川小学校、認定こども園いまかね

◇文化祭 → 今金中学校、今金高等養護学校、今金町総合文化祭（町体育館）

◇その他 → いまかね図書まつり、タウンミーティング

計 8 事業でブース設置。



写真3 情報発信ブースその1



写真4 情報発信ブースその2

■小中学校教員向け研修会「鹿内信善先生講演会」

学校教育における読書と作文のまちの取組みの更なる推進と、学習指導要領の改訂に対応するアクティブラーニングの考え方（協同学習の在り方）を学ぶ機会として、本町の読書と作文のまちの取組みにご指導、ご助言を頂いている鹿内信善教授を招聘し、研修会を開催した。

この研修会には町立学校の教員ほぼ全員が参加しており、本町校長会にも趣旨にご理解頂き、学校毎に参加取りまとめの協力も頂いた。参加した教員からは「看図アプローチによるアクティブラーニングの意味（ねらい）が良く分かった」、「他の意見をきいて気づくことがたくさんあった。協同学習の大切さを学んだ」などの感想を頂いた。

今後も学校教育との連携を深めながら継続した研修の場を提供していきたい。

◇開催日 2016 年 10 月 21 日（金）15:30 ～ 17:30 120 分間

◇会場 今金町民センター「大ホール」

◇講師 福岡女学院大学教授 鹿内信善氏

◇演 題 看図アプローチでつくるアクティブラーニング

◇参加者 43名（学校教育関係37名・行政関係6名）



写真5 小中学校教員向け研修会その1



写真6 小中学校教員向け研修会その2

■幼児教育保育士向け研修会「鹿内信善先生講演会」

2015年に認定こども園いまかねの保育士を対象に看図作文研修会を開催した経過があり、その研修会の中で「ステップを踏みながらいつかは子ども達に簡単な方法でも実践できたらいいと思いました」との感想を頂いた。

今年度は更なるステップアップを目的に、鹿内信善教授の来町に併せて「子どもと楽しむ看図でおはなし」をテーマに研修会を開催した。

研修は図が描かれているワークシートを用いて自身の考えを交流しあう手法で進められ、実際に「看図でおはなし」を体験している幼児の音声も鹿内教授より披露された。お話をつくって話している幼児の音声を聞いた保育士からは、「すごい」「きちんとお話しをつくって説明している」など驚きの声が上がっていた。

今後、認定こども園でも鹿内教授より頂いた看図の材料を使用して、子ども達に取り組んでみたいとしている。

◇開催日 2016年10月21日（金）19:00～20:00 60分間

◇会 場 認定こども園いまかね「遊戯室」

◇講 師 福岡女学院大学教授 鹿内信善氏

◇演 題 子どもと楽しむ「看図でおはなし」

◇参加者 28名（幼児教育関係22名・学校教育関係1名・行政関係5名）



写真7 幼児教育保育士向け研修会その1



写真8 幼児教育保育士向け研修会その2

■デジタルカメラで写真絵本づくり

今年度も芽室町在住の写真家・絵本作家の小寺卓矢氏の協力を頂き、今金町内でも自然豊かな美利河地区を舞台に「ふるさとの秋」をテーマに開催した。

読書と作文のまちワーキングチーム・今金小学校 PTA 研修部の共催で開催し、町内希望者及び小学生とその保護者の参加のほか、今金町役場の新採用職員の参加もあった。今金町役場の新採用職員研修に位置付けられた背景には、今金町の風景を撮り、写真に物語を付け加えていく過程に今金町の魅力を肌で感じ、自身の想いを言葉で表現し物語を紡いでいくことで町職員としてのスキルアップを図る目的があった。職員研修を担当する今金町役場総務財政課と連携できたことも読書と作文のまちの取り組みの新しい視点として評価したい。

また、この事業の担当者として「絵本づくりは楽しい＝作文が楽しい」と思いながら参加者は取り組んでいると感じる。一人ひとりが「作家」となり、自分の中で生み出した言葉を選んで表現し、夢中になって完成させた写真絵本はこの世に一つの宝物である。さらには完成したものを読み合うことで新しい「気づき」につながり、知識となって蓄積されていると感じる。

これからもデジタルカメラで写真絵本づくりをとおして「読むこと」と「書くこと」の楽しさを体験してもらいながら、町民の豊かな心を育てていきたい。

- ◇開催日 2016年10月22日（土）9:00～16:00
- ◇会場 今金町美利河地区「クアプラザピリカ」
- ◇講師 写真家・絵本作家 小寺卓矢氏
- ◇参加者 24名



写真9 デジタルカメラ写真絵本づくりその1



写真10 デジタルカメラ写真絵本づくりその2

■大型北海道弁かるた制作

今年度の読書と作文のまちワーキングチーム会議において、2017年1月7日にこども会連合会と共催で「かるた交流会・むかし遊び体験」を開催することとなった。「体育館に大型かるたを並べてやってみよう」との提案からワーキングチームで大型かるたを制作した。提案したことを形にする作業は楽しく、和気藹々とした中で完成させることが出来た。

◇開催日 2016年12月7日(水) 19:00～21:00

◇会場 今金町総合体育館

◇参加者 読書と作文のまちワーキングチーム関係者 13名



写真11 大型かるた制作作業その1



写真12 大型かるた制作作業その2

白岩がまとめた「活動の概要」には、「図書まつり」の様子が書かれていない。「図書まつり」は「読書と作文のまちづくり」の中心になる活動である。「図書まつり」の内容については、後掲する田中俊一と田名部紗穂里の寄稿文中で紹介されている。このため今年度報告では「図書まつり」の詳細報告は割愛する。

表1 2016年度「読書と作文のまちづくり」ワーキングチーム年間活動計画

事業内容	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
(必要に応じて、回数増もあり)		第1回				第2回		第3回		第4回		
学校授業	◆幼児教育分野での看图作文の実践 / 看图作文の手引きの活用(年間を通して指導計画との関連を図り実践)											
学校図書環境の整備・充実	◆図書室司書派遣事業(毎週火曜日中学校派遣)・町教委との連携による図書の充実・整備											
読書と作文のまちづくり学校	町内先生方一人ひとりに理解して頂けるよう組織し、学校での「読書と作文」の取り組みの充実を図っていききたい。											
PTA				ファミリー ルネッサンス							◆デジタルカメラで写真絵本づくり 10月22日(土)	
PTA	各学校PTA会議等での情報提供や協力依頼、PTA活動支援のために連携して実践えお継続											
地域	◆図書ポイント制「としよば」の継続(4月～)・第13回いまかね図書まつり10月23日(日)											
社会教育団体等	読み聞かせボランティアによる各学校での実践活動や、各社会教育団体等の読書と作文の実践や参画											
実践事業												動く公民館 ・図書館車ブックンの運行(閉校地区含む)・ドリームバスツアー 8月7～9日(2泊3日)
図書	◆夜間開室(毎週水・木)・図書室お話し会(毎月第3土曜日)・町民センター図書室特別展の実施											
通年事業	◆今金ふるさと塾・土曜日の活動推進プランの連携・ブックスタート・本のふれあい便(八雲町との連携)											
活動支援	年間を通して、家庭・学校・地域で行われる実践活動を支援(人的・備品・実施予算の相談 等)											
環境整備	総合体育館をはじめ、利用者の多い施設や地域の図書環境整備を実施する。(病院、各温泉、地域集会所等)											
読書と作文の取り組みに 関連する研修機会の提供	◆鹿内信善先生講演会 10月21日 ①15:30～17:30(小中学校関係者) ②19:00～20:00(幼児教育関係者)											
取り組みの発信・PR等	・図書だよりの発行・各小中学校文化祭及び学習発表会・町行事におけるPRブース設置事業											

◆＝重点事業

Ⅲ. 活動に携わっている方々からの寄稿

「まちづくりは多様な主体が協働し、行政や専門家を動かし時間をかけて成果を生み出してゆくプロセスである。外で見ていると簡単そうに見えるが実は大変なノウハウと技術のかたまりなのである。(佐藤 2005)」これは建築学から「まちづくり」にアプローチしている人の発言である。しかし、佐藤のこの指摘は「読書と作文のまちづくり」にもあてはまる。「読書と作文のまちづくり」には、行政や教育の専門家も力を貸してくれる。成果は、活動を重ねていくことで、時間をかけてゆっくりと生まれてくる。活動においては、様々なノウハウやスキルも発揮されている。しかし、これらは外からは見えにくいものばかりである。今金町ではどのような人たちが何をミッションとして、どのように「読書と作文のまちづくり」に関わっているのだろうか。外からは見えにくい人々の関わり方を理解してもらうため、今年度の報告書でも5人の方に寄稿をお願いした。各寄稿者には鹿内からテーマを伝え、そのテーマに沿った内容で執筆してもらった。まず紹介するのは今金町教育長田中俊一の寄稿文である。田中が教育長に就任したときには「読書と作文のまちづくり」活動はすでに動いていた。新教育長として、これまでの成果をどのように引き継ぎ、「読書と作文のまちづくり」をどのように牽引していこうとしているのであろうか。そのことを明確にするため、『「読書と作文」でまちづくりはできるのか』というテーマを投げかけてみた。次に教育長の寄稿文を載せておく。

『「読書と作文」でまちづくりはできるのか』

今金町教育委員会教育長 田中俊一

目指すところは“人づくり”

9月、読書と作文のまちワーキングチームの会議でこんな挨拶をしたことがある。「読書と作文のまち今金」の目指すところは“人づくり”であり“まちづくり”である。これからまちづくりを担う人材を育てることであると。

この町に移り住んできて驚かされたことがたくさんある。社会教育関連の事業に顔を出す度に、実行委員の皆さんに勢いがあること、何より人と人とが繋がって事業が組み立てられ、その経験が積み上げられてきていること等々、まさに人が育っていく町だということを実感してきた。

読書と作文のまちワーキングチームが関わっている今金図書館まつりもその一つである。今年度も実行委員会主催による、第13回今金図書館まつりが盛大に開催され、子

どもたちからお年寄りまで、幅広く町民の皆様に参加をいただき、楽しんでもらうことができた。

人がつながる図書まつり

平成16年度より実行委員会主催で開催してきた図書まつりも今年度13回目を迎え、実行委員に40名を超える応募があった。いろいろな年齢層であり、職種も様々、昨年に引き続き高校生のボランティアグループの参加もあった。普段顔を合わせることの少ない方、一緒に仕事をしたことのない方達もいる。メンバーが毎年入れ替わりながらも本を通して知り合い交流を深める出会いの場が、毎年進化しながら継続されている。私には凄いことと思えるのであるが、いつもやっていることだと平然と答える。他町から参加した皆さんが驚くのは無理もない。

他町から参加の実行委員の方の声を拾ってみた。

- ・他町にはない貴重な取り組み。実行委員皆さんがよく働きうらやましい。
 - ・同じようなことをいざやろうとしても、理解が得られず今金さんの様にはいかない。実働部隊が限られてしまう。
 - ・図書まつりはやっていますが、今金のレベルにはまだまだ達していません。
- 一方、実行委員のメンバーとして、初めて参加したメンバーの声も拾ってみた。
- ・初めてスタッフをやらせていただき、皆さんの熱い思いが感じられた内容でした。
 - ・初めての参加でしたが楽しかった。来てくれた子どもたちの笑顔に癒やされました。また一つ学べたものがありました。ありがとうございます。
 - ・初参加でしたが楽しみながら運営することができました。様々なステージ発表やワークショップにも参加したり観覧したりしている人がいてうれしく感じた。

キーワードは協同・交流・連携

実行委員会では事前はかなり細かい点まで準備が進められ、それぞれが分担した部会でもチェックが念入りに行われてきた。メンバーへの配慮が行き届き、初参加のスタッフから届けられた声にも、充実感があらわれている。実行委員経験者からは異業種・異年齢の方が忙しい日常をやりくりし、力を合わせることはかけがえのない経験になること、大変でも協力して得たものは、達成感と喜びに変わることなどが綴られ、今後も広がってほしいと結んでいる。

町が掲げる基本構想である「みんなで育てる確かな地域力（まちづくり）」とそれを支える「人材育成（ひとづくり）」を、読書と作文のまちワーキングチームの活動

目標に掲げ実践してきた。今後も「協同・交流・連携」をキーワードとして変革の時代に対応した活動を展開していけることを共通認識し更なる前進をしたいと考えている。

田中教育長の寄稿文の要点はわかりやすい。それは、「人づくり」が「まちづくり」を支えているということである。次に、このことのエビデンスとなる寄稿文を紹介する。田名部（旧姓原田）紗穂里は、大学生の頃から今金の諸活動に関わり、卒業後は今金に就職し、今金で成長し、「読書と作文のまちづくり今金」の力にもなってきた。田名部に依頼したのは「今金に育てられて」というテーマである。田名部の寄稿文は、教育長の寄稿文を読んでから依頼したものではない。他の方々への依頼と同時に行ったものである。にもかかわらず、今回寄せられた原稿は、それぞれにつながりのある内容になっている。今金は、人々が自然につながり合える風土を醸成してきているのである。

今金に育てられて

今金町立今金小学校教諭 田名部紗穂里

大学3年生の春

私と今金との出会いは、大学3年生の4月でした。担当教授の鹿内先生に「原田さん（旧姓）、今金に行ってみませんか？」というお話をいただき、「はい！行ってみたいです」と答えたときのことを今でも忘れることはありません。当時の私は教育大学の学生でありながら、いろいろな職業に興味があり、教職の道一本で志すという踏ん切りはついていませんでした。ただ、漠然と抱いていたのは「北海道民とはいっても、札幌以外のところに住んでみないと、そのよさはわからないだろう」という思いです。ですから、鹿内先生からの「今金」のご紹介は魅力にあふれていました。そして、「今金に行ってみれば、どのような仕事をするべきかは自然と定まってくるだろう」と根拠のない自信もありました。

それから今金との付き合いが始まりました。

私は、今金町教育委員会の社会教育事業で学生ボランティアの一員としてプログラムの企画、運営をさせていただきました。鹿内先生に指導を仰ぎながら社会教育主事の白岩さんとメールでのやりとりを重ね、大学の仲間との準備を重ねて、今金町の自

然や学校、市街地での事業に携わらせていただきました。当時は、事業参加者の子どもたちと接すること、そしてプログラムを運営することに一心不乱に向き合うばかりでした。教育委員会事務局の白岩さんはもちろん、この取り組み全体を俯瞰されていた当時の教育長である中島副町長、そして教育委員会のみなさんは、大学生であった私たちとその荒削りの情熱をあたたく迎え入れ、今金町の誇る社会教育の一端に関わらせてくださいました。このみなさんのあたたかさに心から感謝しています。

今金町嘱託職員としての勤務と学び

大学を卒業してからは、今金町教育委員会の特別支援教育支援員（以下：支援員）として今金小学校で2年間勤務しました。

日中は町内の小中学校で勤務し、授業や日々の生活の中で先生方の指示のもと子どもたちと関わっていきます。また、放課後や長期休業は学童保育所、発達支援センターでも勤務し、普段関わっている子どもたちと異なる場で関わる機会もいただいていた。それぞれの場に先生という立場の職員の方がおり、それぞれの場での子どもたちの過ごし方を教えていただきました。

さらに、支援員は教育委員会の職員ということもあり、町のイベントにスタッフとして関わらせていただく機会がたくさんありました。中でも特に印象深いのは「図書まつり」です。さまざまな職種の人が実行委員として集まり、図書に関する大小のイベントを集合せ町民センターを借り切っておまつりを企画・運営します。ブックリサイクルやブックカフェ、そしてステージを利用したの読み聞かせや人形劇、幻灯、朗読。おもちゃ屋さんを招いたスペースもあります。また、絵本作家の方を招いての講演なども開催されます。近年は芽室町在住の写真絵本作家である小寺卓矢先生にアドバイザーを依頼し、小学校のPTA事業とタイアップして小学生とその保護者や教職員が参加する写真絵本づくりとその展示も行っています。この図書まつりには、親子連れはもちろん、小・中・高校生、お年寄りの方、さらに近隣市町の図書関係者など幅広い層の人々が足を運びます。支援員はこの図書まつり実行委員会の一員となり、ステージ部門や装飾部門など、それぞれの興味や特技を生かして参画します。

この支援員の経験でも感謝して振り返ることは、町のみなさんとのつながりができたことです。支援員は小中学校で勤務していながらも時間にゆとりがあり、休日に行われる事業に関わったりボランティア活動に参加したりとさまざまな経験をすることができます。司書の船木さんや読みきかせボランティアのみなさん、学童保育所の先生方、発達支援センターの先生方、図書まつり実行委員会のみなさん…。また、普段

学校で接する子どもたちや保護者の方々に学校以外の場で関わる機会がたくさんできました。散歩に出たり買い物に行ったりすれば「先生！こんにちは」といろいろな人に声をかけてもらえるようになりました。

さらに今金小学校教員として

そして、私は大学を卒業して3年目の春から今金小学校の教員として働いています。「ぜひ今金で」とお願いして希望を出しました。

支援員時代に図書まつりをはじめ、毎月行われる町の図書室のおはなし会などに参加していた私は、いつしか絵本に魅せられて読みきかせボランティア「マザーズぼけっと」に正式に加入しました。教員になって1年目のことでした。勤務校の先輩教員がこのボランティアで生き生きと活動していたので、自然に入っていきことができました。子どもに読みきかせをするのがおもしろかった絵本は、気が付けば自分自身の心の潤いとなり、癒しともなり、新たな世界を見せてくれる存在となりました。

さて、私はここまで、「今金に育てられて」というテーマで今金と自分自身とのお付き合いを振り返ってきました。今金のみなさんとの関わりが私に身に付けさせてくださった教育に関わるスキルは細かく見ていけばたくさんあることでしょう。しかし、スキルというよりは、「地域の人とともに生きる」ということの価値を私の心に育てていただきました。今金のみなさんは、魅力に溢れています。今金のみなさんの魅力、そのみなさんが進める取り組みの魅力をここでお伝えすることが、私が今金に育てられたことを証明するのです。

田名部の寄稿文は人の心に届く内容になっている。「今金のみなさんの魅力、そのみなさんが進める取り組みの魅力をここでお伝えすることが、私が今金に育てられたことを証明するのです」とくにこのことばは、今金の人たちに対しては「感謝のことば」として届くものであろう。

田名部はかつて、大きな可能性を秘めた学生として私（鹿内）のゼミに入ってきた。かつてのゼミ生が、魅力あるまちの魅力ある活動に貢献できる人材に育ててくれたことは、指導教員であった私（鹿内）にとってもうれしいことである。この寄稿文には書かれていないが、田名部が「読書と作文のまちづくり」にしてきた貢献は大きい。

今金は「読書と作文のまちづくり」を掲げているが、「読書」と比較して「作文」への取り組みが手薄であった。この問題を感じ取った原田（田名部の旧姓）は、後に夫となる

田名部圭一とともに様々な場をつくり、作文ファシリテーションを行ってきた。例えば「女性部での看图作文」「高齢者を対象者とした看图教室」「幼児教育者を対象とした看图作文研修」等々である。これらの活動は、明確な問題意識とそれを解決しようとするビジョンをもって行われたものである。だからこそ田名部らの活動は「読書と作文のまちづくり」の可能性を拓いていく取り組みになっている。田名部らは小学校の教諭である。では、中学校は「読書と作文のまちづくり」の可能性を拓いていけるのであろうか。この見通しをもつために、今金中学校校長松原真一に「中学校は読書と作文のまちづくりにかかわれそうか」と問いかけてみた。この問いかけをタイトルにした松原の寄稿文を次に載せておく。

「中学校は読書と作文のまちづくりにかかわれそうか」

今金町立今金中学校校長 松原真一

本校では、登校してきた生徒は、8時25分のチャイムがなるまで静かな環境の中で朝読書を行っています。小学校も同じように取り組んでおり習慣化されているため、中学校で特別に指導しなくても入学したときから当たり前のように読書をしています。この朝読書は日本全国で行われていて、その目的として「読書への関心を高める」「仲間の本を参考に読書の幅を広げる」ことが挙げられます。「落ち着いた学校生活を送る」「創造力・思考力・理解力が高まる」など、生活面・学習面での効果も期待できます。

昔は、好きだから読書をする。つまり娯楽の1つとして読書が根付いていました。それは、子どもの頃からの習慣も一因だと思います。だから、習慣化することも、中学校までの9年間の朝読書の意義の1つであると思います。

また、町が進めている「としょぼ」への参加により、町の図書を借りる生徒が増えてきています。図書の貸し出しがコミュニティの場となれば、今金町が進めている「読書と作文のまちづくり」に繋がるのではないのでしょうか。

一方作文に関しては、国語の授業はもちろんのこと、外部からの作文依頼や意見発表会、行事ごとに作文を書くなど、その機会が多くあります。作文の目的は「言葉を通してよりよく考える力を養うこと」「言葉を用いて明快に表現したり伝達したりすること」などです。今、インターネットが当たり前の時代となり、いろいろな場面や形で社会へのメッセージを伝える機会が多くあります。中学時代はそのスキルを磨くのに大切な時期でもあります。

読書は「相手を理解すること」作文は「自分を表現すること」と考えると、その両輪を機能させ、コミュニケーションの場、ICTを利用した情報発信、地域内・地域

間の様々な業種との連携・交流などの要素と結びつけることが、これからのまちづくりに大切であると思います。

本校の美術部は絵本を題材に、粘土で登場人物等の模型をつくり、ストップモーションアニメーションの手法で動画を作成し文化祭で発表しています。創造的思考を表現する活動をするには、地域のサークル活動の参加に興味を示すきっかけにもなると考えられます。また、本校生徒は職場体験学習・食育などで地域の方にお世話になり、発表会などを通して地域の方に思いを伝えています。小学校へ職場体験学習に行った生徒は、小学生に読み聞かせなども行っています。こども園の保育訪問でも幼児に絵本の読み聞かせを行っています。高校生は学習支援に中学校に来ています。今金町は、幼・小・中・高そして地域の連携が強くあります。今、中学生はそのような活動を通してまちづくりにかかわっていると感じています。

松原の寄稿文は現状報告になっている。しかしそこから、いくつかの発展可能性を読み取ることができる。松原の寄稿文に関連する実践をあげてみよう。

絵本の読み聞かせを主とする、中学生の保育園訪問は各地で行われている。和歌山県の中学校教師鈴木有香子はこの活動にひと工夫加えている。鈴木は読書と作文のまち今金に提供可能な実践プログラムをつくってくれている。鈴木の実践は次のような流れになっている。生徒たちに看图作文を書いてもらう→その中からひとつ選び脚本に書き直してもらう→その脚本をもとにペープサートをつくる→保育園でペープサートを公演する。鈴木が提案しているプログラムでは、生徒たちが自分たちでつくった作品を発信することによって社会貢献していく優れたものになっている。この実践は、鹿内・鈴木（2016）で詳しく紹介している。

鈴木プログラムは松原校長が報告している粘土を使った美術部の活動のレベルアップにも応用できる。看图作文を書く→それを脚本化する→登場人物を粘土模型にする→映像作品化する。このように「看图作文を書くこと」「脚本を書くこと」、2つの作文活動を取り入れてみたらどうであろうか。それらの活動をもとにできあがる作品はオリジナリティーのあるものになる。どこでもやられている粘土の作品づくりは、どこでもやっていない今金発の「クレイアート」になる。しかも絵本を題材にして作品化した場合に生じる著作権の問題も完全にクリアできる。せっかく美術部の生徒たちはクレイアートのスキルをもっているから、そのスキルと創造性をもっと伸ばしてあげてもいいのではないだろうか。

「読書と作文のまちづくり」というコンセプトに依拠して現状を見直すことによって拓

けてくる可能性は大きい。積み上げてきたものを基盤にして、次は何を積み上げていくのか。その方向性を町民も参加して考えていくシステム（読書と作文のまちワーキングチーム）も出来上がりつつある。地域の力を取り込んだ「チーム学校」をつくり上げれば、中学校も「読書と作文のまちづくり」に関われるのではないだろうか。中学校も明確なビジョンをもって読書と作文のまちづくりにつながる活動を積み上げていく必要がある。

ここで「積み上げていくこと」という重要なコンセプトにたどり着いた。次に、このタイトルで書いてもらった「読書と作文のまちワーキングチーム」のリーダーである小川ひとみの寄稿文を載せておく。

「積み上げていくということ」

読書と作文のまちワーキングチームチーフ 小川ひとみ

「読書と作文のまち」ワーキングチームの活動も、今年度で4年目にはいりました。今年度は、鹿内教授をお迎えして、小中学校の先生方にむけての研修会、幼児教育の先生方にむけての研修会を実施することができました。先生方、教育委員会職員、ワーキングチームのメンバーの、多数の出席がえられ、充実した研修会でした。また、1月の事業に使う大型かるた作りにも、ワーキングチーム中心に多くの人の協力をえることができました。参加者が多いということは、今までの積み上げてきた活動への評価ともいえるとおもいました。補足として、今度は、一年かけて、今金版大型かるたを、子どもたちと一緒に、作っていききたいというプランも出ています。作文の取り組みにもなります。

次に、今金小学校の取り組みを、ご紹介します。研究大会の時に、教育活動の紹介として流された映像で知りました。朝自習の朝読の取り組みの中で、週一回、朝作文をしているということです。短い文章で、テーマがあったり、自由だったり、先生がいろいろ工夫をされています。子どもたちは、一生懸命取り組んでいるようです。ワーキングでも、作文の部分のアプローチが課題だったので、学校の現場で、取り組まれていることに感動しました。校長先生をはじめ、何人かの先生が、常にワーキングの活動に協力していただいていたことが、こういう取り組みにむすびついたのであればうれしいです。

また、この研究大会は、ICTの実践校の発表の場でした。子どもたちがタブレットを使って、自分の学んだことを、全員が皆の前で堂々と、発表していました。まさしく、インプット、アウトプット、読書と作文だと思いました。

これらのことは、ワーキングチームの学校の取り組みのひとつであるということ、日頃の教育活動の中で、実践されているということ、認識することができました。後日、ワーキングチームの会議の時に、このことをみんなで共有することができました。

地域・学校・行政が、それぞれの立場の中で、「読書と作文」を意識した活動が、根付いてきたことを証明する出来事でした。

今年度の始めに、町長が行政報告の中で、「読書と作文」を施策として、取り組むことをあげました。活動の取り組みを確認するために、教育委員会として、取り組む姿勢をうかがったり、町には町づくりとして考える体制をうかがいました。教育委員会職員の共通認識、教育委員会だけでなく、町として、それぞれの課が、協力体制をとるという確認が得られました。これから、この活動を積み上げていくために、必要な確認だったとおもいます。

最後に、私は、こうして原稿を書かせていただきながら、いつもいろいろな発見をしています。そして、それがこれからの「読書と作文」の活動にむけてのヒントになります。

「積み上げていくということは」それぞれの立場で、それぞれが実践していき、その成果を積み上げていくこと。頭の中に、根付いていくこと。目にみえるものではないが、その成果は、目に見えてくる。その積み上げの結果が、「読書と作文のまち」につながる。ということでしょうか。先はまだまだ長いですが、確実に前に向かっていくことは確かだと思うのは、まだ早いでしょうか。的確な言葉が見つからず、うまくお伝えできないことをお許しください。

子どもたちに、楽しく学んでもらいたいので、ワーキングチームのメンバーも楽しく活動をしています。

小川も、これまでの「読書と作文のまちづくり」活動において「作文の部分のアプローチが課題」であると感じている。しかし、今年度は作文への取り組みが充実し始めている。そのひとつが今金小学校で行われている「週一回の朝作文」である。また「校長先生をはじめ、何人かの先生が、常にワーキングの活動に協力して」くれていることも報告されている。「読書と作文のまちづくり」は、学校・地域・行政・大学の連携が原動力となって展開される活動である（例えば鹿内 2013）。学校が連携の輪に入ってくれば、着実に成果が生まれてくることを「週一回の朝作文」実践は示してくれている。「週一回の朝作文、月一回の看图作文」など、今後のさらなる発展にもつながるものである。

上掲した小川寄稿文の最後の一文に「楽しく」ということばが2回も出てくる。積み上

げていくプロセスの中で、前が見えない辛さを感じることもあるであろう。しかし「読書と作文のまちづくり」には「楽しい」と感じさせる何かがあるから積み上げていくこともできるのである。次に、短い文章の中に「楽し」「喜び」ということばが9個も出てくる寄稿文を紹介して本年度活動報告の締めくくりとする。

「教育委員として関わりたい読書と作文のまちづくり」

今金町教育委員 小野嘉代子

わが町今金町にも図書館が出来る。そう思うと、わくわく感が増して来ます。町民の方からも楽しみにしていると言う声を聞きます。しかし、「本当に図書館は必要なのか?」「今ある図書室ではダメなのか?」とおっしゃる方がいるのも現状です。この様な声があっても不思議ではないですし、実際に図書館に行かれた事の無い方などは、想像するのが難しいのではないかと感じています。「図書館が出来て良かった」と多くの方に思ってもらえるようなまちづくり。その為にどう関わって行くか?自分と本との出会い、娘たちと本との出会いを思い出してみました。

私が子どもの頃に読んだ本の中で、とても衝撃を受けた本が2冊あります。「ナイチンゲール」と「アンネ・フランク最後の7カ月」。何歳の時に読んだのかは覚えていませんが、この2冊の本を読んで「人にはやさしく」「人を差別してはいけない」と教えてもらったように思います。

娘たちに初めて読んであげた本は「いないいないばあ」でした。娘がニコニコと笑い、それを見ていた両親も「笑った」と笑顔になり、絵本は皆を笑顔にすると感じたのを思い出します。今は亡き父が娘たちの為に、小学校入学から高学年になるまで、毎月本が1冊届くシステムで本のプレゼントをしてきていました。そのおかげで、我が家の本棚は本でいっぱいでした。娘たちも大きくなり、我が家にあった本は知人のお子さんの所へ。お子さんが本を読んで楽しんでくれたら良いと思います。

大学生になった娘は、小学校教員免許を取得する為に学んでいます。その娘から、学校の授業で絵本の読み聞かせをするので、家に絵本があったら送って欲しいと連絡が来たことがあります。すでに家に絵本はなく、私は迷わず町の図書室で、いまかぬ絵本「だいすきだんしゃくくん」を購入し送りました。同じ学部の学生さんにも読んでもらいたい・・・と思いながら「だいすきだんしゃくくん」を選びました。

そして、私が最近出会った本は鹿内先生の「協同学習ツールのつくり方いかし方」です。看图作文はどのように勉強するのだろうか?と興味がありました。今金町で鹿内

先生の研修会が行われ、私も学校の先生方と一緒に出席させてもらい、研修の時間があっという間でとても楽しい時間でした。看图作文についてももう少し知りたい思いがあり、鹿内先生の本を読んでみました。学校の先生だけでなく、子どもから大人まで日々の生活の中で「家族が協同で学び合い家族が共に喜びあう」という事が出来る看图作文・協同学習の楽しさを本を通して教えて頂きました。

振り返って見ると、本との出会いのおかげで多くの事を教えてもらったように思います。

「この本を読みたい」と決まっていなくても、図書館で本を眺めていると読みたい本に出会うと言います。日々の生活の中で、どんな本が今必要か？時には絵本だったり、小説かも知れません。また、看图作文のように家族が共に喜び合う本かもしれません。まず図書館に足を運んで沢山の方に色々な本に出会ってもらいたいと願っています。

私は子どもの頃、本を読んで感想文を書くのが苦手で、感じた事をどのように文章にしたら良いかと嫌いな授業の一つでした。しかし大人になった今、看图作文を知り、目で見て感じた事を文章にする事が楽しいと思えました。鹿内先生の言葉にあった「見ることを楽しみ書くことを喜ぶ看图作文の世界」は、まさしく子どもから大人まで楽しめる世界と思えました。

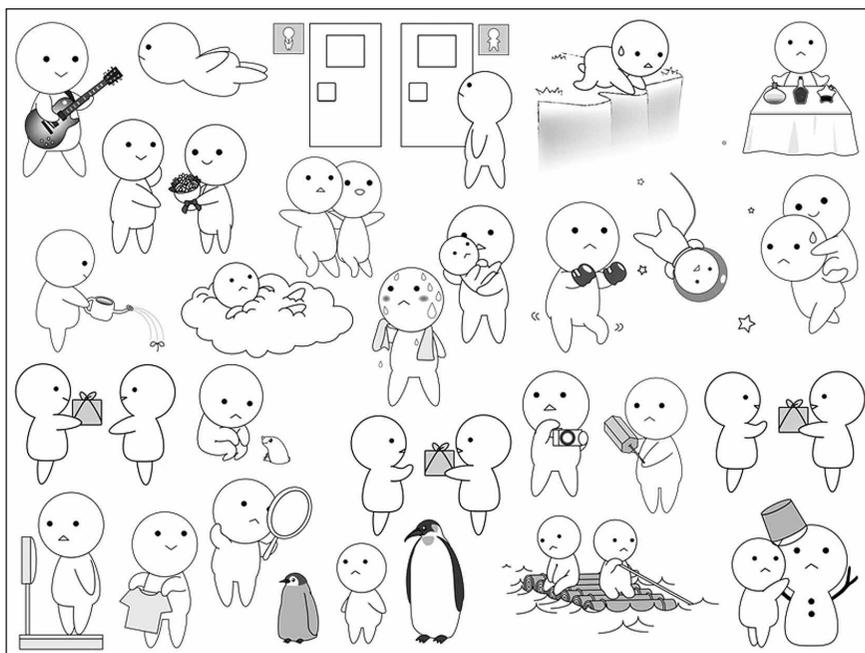
これから、「本を読む事は好きではない」「作文が苦手」と言う事を耳にする事があれば、「まず看图作文を覗いてみませんか？」と声をかけてみようと思います。

見えていないものが突然見えてくると、子どもたちはとても喜ぶ。小野の寄稿文には、絵本『いないいないばあ』のことが書かれている。この絵本を読んであげたときの子どもの反応は、読んであげた者にとってもうれしいものである。見えないものが突然見えてきたとき、乳幼児が体験するこのポジティブな感情は、私たち大人ももっているのではないだろうか。

「読書」も「作文」も、ごくありふれたことである。その2つがつながって「読書と作文のまちづくり」という活動になったとき見えてくる新しいものがある。ごくありふれたことを2つ結びつけるだけで、それまで見えていなかったものが見えてくる。それが楽しいのである。「読書と作文のまちづくり」活動を今金にとっての『いないいないばあ』にするために筆者（鹿内）も連携を継続していきたい。

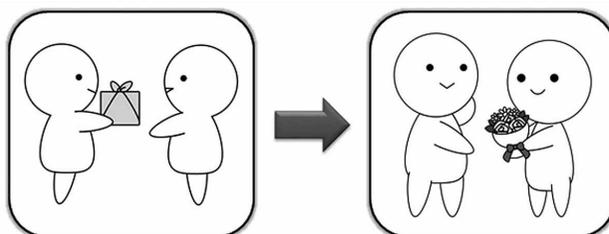
付 録

本文中にも紹介されているが、本年度鹿内は今金町において幼児教育担当者に「看図でおはなし」というワークショップを行った。そのときに使用した絵図を載せておく。私たち（石田・鹿内）が開発してきた絵図見本集が以下である。絵図はこの他にもたくさん開発しているが、一例として載せておく。

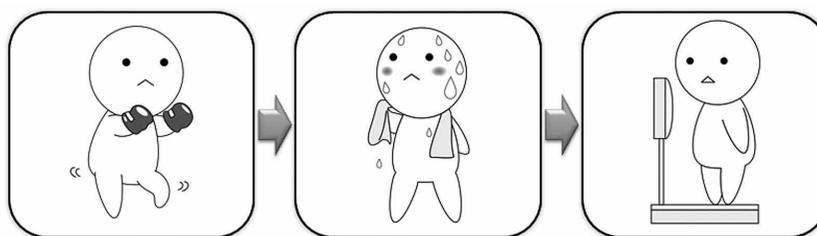


付図1 絵図見本集

この絵図集の中から、いくつかの絵図を選んで並べると「おはなしのもと」をつくることができる。例えば次のようなものである。



付図2



付図3

このような絵図を見せて、子どもたちに「おはなし」をつくってもらった活動が「看図でおはなし」である。上掲絵図のキャラクターを私たちは「きゅうちゃん」とよんでいる。これらの絵図は科学研究費「聴覚障害児の言語活動を充実させる看図アプローチを用いた教材開発・授業開発」（研究代表者鹿内信善）の助成を得て作成されたものである。今金での「看図でおはなし」の成果は聴覚障害児の言語学習支援に提供することになっている。このように「読書と作文のまちづくり」活動は、単に今金町の中で完結するものにはなっていない。人々の役に立つ発信力のある活動にしていくことができる。

文献

- 伊藤公紀・小川ひとみ・坂本孝子・鷺野咲恵・田名部圭一・鹿内信善 2015 『『今金町「読書と作文のまちづくり」』活動報告（Ⅰ）』『札幌大学総合論叢』第40号, pp.105-125
- 伊藤公紀・小川ひとみ・白岩政浩・船木恵・中島光弘・鹿内信善 2016 『『今金町「読書と作文のまちづくり」』活動報告（Ⅱ）』『札幌大学総合論叢』第41号, pp.35-47
- 佐藤滋 2005 「シリーズまちづくり教科書発刊にあたって」 日本建築学会（編）『まちづくり教科書8景観まちづくり』丸善, p. i
- 鹿内信善 2013 「読書と作文のまちづくり」『国語教育研究』第489号, pp.36-37
- 鹿内信善・鈴木有香子 2016 「看図作文による地域貢献 - 中学生と保育所幼児の交流 -」『福岡女学院大学大学院紀要』第1号, pp.43-49

注1：本研究の一部はJSPS 科研費 JP25590253 および JSPS 科研費 16K04728（いずれも研究代表者鹿内信善）の助成を受けたものである。

注2：本稿の構成は鹿内が行った。本稿の文責は鹿内を負うものである。本稿では寄稿文を引用した。各寄稿文の執筆者名は本文中に明記してある。伊藤公紀はJSPS 科研費 JP25590253の研究分担者である。研究計画調書には伊藤の役割として「活動のアーカイビング」をあげてある。本稿は活動アーカイビングのひとつとしてまとめたものである。

注3：本稿に掲載している写真にはモザイク処理を施していない。写真に写っている人はすべて「読書と作文のまちづくり」活動の関係者である。また写真に顔が写っている児童は活動関係者の子どもである。全員からモザイク処理は不要であるという承諾あるいは代諾を得ている。

注4：「きゅうちゃん」シリーズ絵図の著作権は「石田ゆき」にある。しかし授業等、営利を目的としない活動においては自由に使用することができる。